

- 2 マッケイはその多くが古典となった詩のほか、小説でも著名であり、小説では『アナキストたち』と『自由探究者』をあげるのが適切である。なお彼はドイツの個人主義的アナキズム運動に果たした役割においても著名である。
- 3 『ツアラトックストラ』の詩人の額は、彼がホッブス以後出版された最も大胆な書物と評した『唯一者』の名が、彼の前に口にされたとき、輝いたという。「彼はシュティルナーとの相似をよく感じていたので、自分がいつか彼の剽窃者としてとおるようになるのを恐れていた」。(Ch・アンドラー『ニーチェ、その生涯と思想』第四巻、一九二八年)
- 4 マックス・シュティルナー『小論文集』(一八九八年)より抜萃。マリ・ゲランの翻訳による。
- 5 マックス・シュティルナー『唯一者とその所有』(一八四八年)より抜萃。表題はすべて編者のものである。(草間平作訳・岩波文庫、片岡啓治訳・現代思潮社)
- 6 ドイツ語では Volkstaat. ドイツでシュティルナーの時代すでに一般に用いられていたこの表現は、四分の一世紀後ドイツ社会民主党の標語の一つとなった。マルクスとエンゲルスは、初めこの表現を大目に見ていたが、この点バクレーンの批判で攻撃されてからは、それを非とした。
- 7 『小論文集』より抜萃。
- 8 『唯一者とその所有』より抜萃。

P = J. プルードン 1809-1865

「ビエール・ジョセフ・プルードンは一八六五年一月十六日、パリで、度はずれな頭脳酷使のため早くも身を消耗しつくし、ようやく五十六歳にして死んだ。この元労働者、百姓の息子、独力で身を立てた独学者の人となり、わずか数語でどのようにして想起させることができるか。」

ほかのすべての功績は別にしても、彼はフランス語で最大の著述家の一人であり、文芸批評家サント＝ブーヴは彼に「一書全体を充てている」。(Sainte-Beuve, P.-J., *Proudhon, sa Vie et sa Correspondance*, 1838-1848, Paris, 1872. 原書「現代思潮社」)

プルードンの天分は多方面にわたり、彼の全著作(書簡集十四巻、刊行中の手帳(三巻)、ビエール・オブマンの学位論文が示す未刊の草稿を加えて)は多過ぎるほどである。彼は、「科学的社会主義」、社会主義経済学および現代社会学の父であり、同時に、アナキズム、革命的サンディカリズム、連合主義および今日「自主管理」を実現する特殊な形態の集産主義の父である。歴史、とくにフランス革命やナポレオンに対する彼の見解は、ミシュレ(ジュール・ミシュレ、著名な歴史家)持ち前

の直観的洞察を含んでいる。最後に、またとりわけ、権威主義的、国家管理的、教条主義的社会主義の危険を最初に見てとり、予言的に告知したのである。

一八四八年の革命はプルードンにとって、勇気を欠いたどころか、革命の舞台に降りていく機会となり、第二次ボナパルト体制のもとでの大胆な現状顛覆を訴える文書のために、彼は訴追、投獄、亡命を蒙る身となった。

彼の独創的かつ逆説的な精神的傾向は、強力な庶民的熱情のために誇張され、あまりにもしばしば彼の頭脳を、戦争、進歩、女権拡張論、人種主義、芸術、性等々に関する極端な観念に沸きかえらせた。彼は初期のキリスト教による人間形成からけつて全体的には解放されなかったし、彼の最も記念碑的な著作、かつて表明された反教権主義の中で最も辛辣かつ粉砕的な著作の一つにおいても、正義は、結局のところ、神からほとんど区別されないし、それと同義であるように思われる。彼はさらに、ある人々をおしてヘーゲルを読んだことに負うている強度の観念論的痕迹を打ち棄てることに成功せず、彼の根本

において法的な精神は唯物論的歴史観には閉ざされていたのである。

革命家であると同時に保守家、自由の精神であると同時に秩序の精神であるブルードンは、最も対立するものもろのイデオロギーの主張者とされた。存命中から大いに読まれ、騒々しい世評の対象であったのに、彼は妙に孤独であった。

マルクス主義は、彼に多くを負うており、また彼を必ずしもつねに誠実に攻撃したわけではなかったし、長いあいだ彼をおおい隠してきた。マルクス主義は、行動面では、ブランク主義、議会制改良主義、アナキズムおよび国家主義の間に、理論面ではヘーゲル哲学とイギリス経済学の間に、分裂しているけれども、少なくとも表面的には、ブルードンの時として見える混沌たるヴィジョンよりも一貫している。十月革命と赤色エビゴネンたちの裏切りとをまったく同時に利用した、一時的勢力、今日不当にもマルクスの名をかたって行われている恐るべき知的独裁は、ブルードンの名声を傷つけた。彼はきのうまでわずかしら知られず、中傷され、忘れ去られてきた。人々は、彼に「ブチ・ブル的」という侮蔑の形容詞を浴びせれば、それですべてを言いつくしたように思い込んでいた。だが、「マルクス主義者」の陣営でも、彼を読みまおし、悪口の調子を落しはじめている。

若きブルードン・自画像

私は自分の私生活について語るべきことは何も無い。それはほかの者たちに関係のあることではない。私は自

叙伝などというものにはほとんど趣味がなく、だれであろうと他人の事には関心がない。歴史自体や物語が私の心を引くのは、そこに、われわれの不朽の大革命におけるように、観念の冒険を見出すかぎりにおいてのことではない。

……私は、一八〇九年一月十五日ブザンソンで、ドウブ県のポントラルリエに近いシャスナン生まれの樽職人、ビール醸造人、クロード・フランソワ・ブルードンと、同じ県のビュルジュ・レ・マルネイの小教区コルディロンのカトリクス・シモナンとの間に生まれた。

私の父方および母方の父祖たちはみな、遠い昔から賦役と財産移転税を免除された自由な労働者であった。

……私は、十二歳になるまでほとんど全生活を農村で過ごし、細々しい百姓仕事であった。牝牛の番をしたりした。私は五歳にして牛飼いであった。私は、野良で働く人間の生活にもまして、瞑想的で同時に現実主義的な、教育とキリスト教的生活との根底をなす、この不条理な精神主義に正対な生活を知らない。

……かつて、私の牝牛のように食いたいと思った丈の高い牧草の間を駆け回ったり、垣根沿いの細道を裸足で走ったり、深く掘り返した生々しい地面に緑色のトルコ麦をうす高く積み重ねてそれに脚をつっこんだりして、私はどんなに楽しかったろう！六月の暑い朝、私はいく度となく着物を脱ぎすてて芝生の上で露を浴びた。

……その頃は自分と自分でないものとほとんど区別

がなかった。自分とは、手でふれ、眼で見ることができないもの、何かの点で私によいものすべてであり、私でないものとは、私に害を与えたり逆らったりすることのできるすべてであった。私は一日中おなかに桑の実、してしやじんの根や葉(結梗科の植物、根や葉を食用)、手近のばらもんじんの根、未熟の豌豆、けしの種、焼きとうもろこし、あらゆる種類の漿果、すなわち、りんぼくの実、野生の梨、ななかまどの実、野生の桜んぼ、野ばらの実、野生ぶどう、種々の野生果物などをたらくつめこんだ。私は、やさしく育てられたブルジョアの子供なお腹が裂けるほどたくさん生物を詰めこんだが、それは私の胃袋には夕方になると猛烈な食欲を感じさせるといふ効果しかなかった。親切な自然はそれにふさわしい者たちには害をしないものである。

……どんな夕立に遭ったことだろう！何度骨までもずぶ濡れになって、着たままで衣服を北風や太陽で乾かしたことだろう！夏には川で、冬には泉で、いつもどんな水浴びをしろろう！私は岩穴に身を隠した。私は罌で跳ぶ蛙や穴のなかにいるざりがにを捕えたが、恐ろしいさんしょう魚にぶつかるといふ危ない目にも会った。それからすぐその場で獲物を炭で焼いた。人間から動物にいたるまで、この世に生存する万物に密かな同感と憎しみが存在し、文明はこの感情を奪っている。私は私の牝牛を不釣合な愛情で愛した。私は牝鶏や樹木や岩を偏愛した。人は私がかげを人間の友だちにして

といったが、私は本当にそう思っていた。しかし私は蛇やがまや毛虫とはいつも荒々しく戦った。彼らが私に何をしたいというのか？何の罪もない。私にはわからないが、人々の経験が彼らをいよいよ嫌いにさせたのである。

印刷工としてのブルードン

……高等中学を出ると、仕事場が私を迎え入れた。私は十九歳であった。自営の生産者となり交換者となった私の日々の労働、習得した知識、いっそう強まった私の理性は、私を、前にはなしえなかったほど深く問題を掘下げることできるようになった。いろいろ努力したが無駄で、闇はますます深くなるばかりであった。

え、なんだって！私は自分の方針を「押し進め」ながら毎日こう考えた。もし生産者が何かの手段で彼らの生産物とサーヴィスをほぼそれにかかっただけの費用で、したがって値打ちだけの価格で売ることと同意できなかったならば、むろん大金儲けをする者はもっと少なくなるが、倒産者も減り、すべての物価は安くなって、極貧者はずっと少なくなるであろうと。……どんな確実な経験も、意志と利益とが、平和、それも乱されることのない平和という成果を生み、富が一般的条件となるように、均衡されうることを証明していない。……問題のすべては、調和、釣合、均衡の原理を見出すことに存するのである。

リヨンで、ついでマルセイユで数週間働いたあと、いつも仕事がなかったの、私はトゥーロンに向かい、そこへ最後の資力、三フラン五十サンチームをもって到着した。私はかつてこの危機的な時ほど陽気で自信にみちたことはなかった。私はまだ人生の借方と貸方を計算することを習っていないかった。私は若かったのだ。トゥーロンで仕事は何もなかった。来るのが遅すぎたのだ。私は二十四時間のところで「手の打ちよう」がなくなっていた。ある考えが、その時としては真実のインスピレーションが、私の心に浮かんだ。パリで失業労働者たちが政府を攻撃している間に、私としても当局に向けて催告をしてやろうと決心した。

私は市のホテルに滞在した。そして市長に話したい旨を申し入れた。市長室に通されると、私は市長の前に旅行免状を差し出した。

——市長さん、と私はいった。この紙片に私は二フランもかかりました。これは、私の身柄に關し、私の地区の署長が知名の証人二名立会いで提供した資料によって、私に必要な場合、援助と保護を与えることを約束し、民間および軍の当局にそれを命じています。ところで市長さん、あなたは私が植字工であり、パリにいたとき以来仕事を探して見つからず、貯えもつきたことをお分かりでしょう。盗みは罰せられ、乞食は禁じられています。年金など万人のためのものではないのです。残るのは仕事で、その保証だけが私の旅行免状の趣意を果た

すように思われるのです。そこで、市長さん、私はあなたのご処置に自分をお任せするわけです。

私は、その少しあと労働に生き、でなければ闘争に死ぬ！を標語とした人々の仲間であった。彼らは、一八四八年、共和制に同意して三カ月間苦しい生活を過ごし、六月には彼らの旗に、パン、弾丸か！と書いた。私は間違っていた。いまではそれを認める。私の例が私と同じような人たちに教訓となるように。

私が話しかけたのは、小肥りのぼってりした、満ち足りた様子の、金つるの眼鏡をかけた小男で、たしかに彼はこうした約束の用意はできていなかった。私は彼の名をノートしたし、自分の好きな人たちを知っておきたい。その一人は、トリプトまたはトリバトともいわれる、ギウー氏なる人物であって、彼は古参の代訴人で、七月王朝で見出された新人であり、金持ではあるが、息子たちのための学校の財源を軽んじはしなかった。彼は私のことを將軍埋葬のさいパリを揺り動かしたあの蜂起の逃亡者としてにちがいがなかった。

——君、と彼は脇掛け椅子で身を回しながらいった、君の要求は無茶だ。君は旅行免状を曲解している。それはただ、だれかが君を攻撃したり君の物を盗んだりするようなことがあったら、当局が君を護ってやるということにすぎないのだ。

——いや、市長さん、法律というものはフランスですべての人間、罰すべき犯罪者たちさえ保護します。憲

兵だって、合法的防衛の場合以外、逮捕した殺人者を打つ権利はないのです。だれかが監獄にいれられても、獄長はそいつの持ち物を横取りすることはできません。旅行免状は手帳と同じように身につけているのですから、労働者にとってはそれ以上の何かを意味するものか、でなければ無意味なものです。

——よし、君が郷里に帰れるために一リユー(四キ)当たり十五サンチーム差しあげることにしてしよう。君にしてあげられるのはこれだけだ。わたしの権限ではそれ以上のことはできません。

——市長さん、そいつは施しというものです。私はそんなものは受けたくありません。それに郷里へ帰ったところで、する仕事は何もないことがわかっていますし、今日あなたにお会いしているように、私の所の市長に会うことになるだけでしょう。ですから、私が郷里に帰るとしても、国家に十八フランの負担をかけるだけで、だれの利益にもならないでしょう。

——君、そういわれても、わたしの権限ではどうにもならんのだ……

彼はそこから出ようとしなかった。私は合法性の場で失敗し押し返されたので、別の綱でやってみようとした。たぶん、と私は考える、人間は役人としてよりもむしろなものが欲しいだろう。平静な様子や、禁欲抜きのキリスト教徒らしい顔つきとか、だが栄養のよい者たちはいまでも人がよい方なのだ。

——市長さん、と私はまた話しはじめた。あなたの権限では私のお願いを聞き届けられないのでしたら、私に助言してください。私は印刷所以外のところでも必要に応じ役に立つことができます。そして私はどんなことでもいやがりません。あなたはその場所をご存じでしょう。何かすることがありますか。ご助言くださいませんか。

——君、引き取りたまえ。

私はこの人物をじろと見た。

——よろしいです、市長さん、と私は齒をくいしばっていった、この会談をとくと覚えておくことを約束します。

そして市役所を出てから、イタリア門を通ってトゥーロンを離れた。……二年前から私は世のなかを駆け回って、私の社会的条件からしてより近しい下層階級の人々を研究したり、彼らに物をたずねたりした。本を読む時間はほとんどなく、書く時間はいっそう少なかった。

……これが今日までの私の生活であったし、また今の生活である。民衆の悪と徳との証人である仕事場に住み、日々額に汗して得たパンを食べ、わずかな賃金で一家を扶養し、兄弟の教育に尽くさなければならぬ。こうしたなかにあっても、ものを考え、哲学を学び、思いがけない観察でえられるどんな些細な物事をも収集している。

労働者の不安定な状態に疲れはてた私は、ついに同業

者の一人といっしょに小さな印刷所を創立しようとした。二人のわずかな貯えを共同のものにし、また彼らの家族のすべての資力をこの僥倖にかけた。事業といゆる不実の勝負事はわれわれの希望を裏切った。秩序、労働、節約、何一つ役に立たなかった。二人の仲間のうち一人は林の片隅で疲労と絶望から死ぬ破目になり、もう一人は父の最後のパン切れに手をつけたことをただ後悔するだけになった。

公けの生活への門出

……私の公けの生活は一八三七年フィリップ^⑥の腐敗墮落のさ中にはじまる。ブザンソンのアカデミーは、アカデミー・フランセーズ秘書ニューアル氏遺贈の三カ年奨学金を、文学または科学の道を志すフランシユ・コンテ(ブザンソンの州)の財産のない若者に与えることになってた。私はその一人に数えられた。アカデミーに提出し、その文書に残っている覚書で、私は次のように述べた。

「労働者階級のあいだで生まれ育ち、心と情愛、とりわけ苦しみと望みとの共同性によって彼らに属している私の最大の喜びは、もしアカデミーの賛意を得ますならば、哲学と科学とにより、私の意志のあらゆる精力と私の精神のあらゆる力とをつくして、私が喜んで兄弟、仲間と呼ぶ人々の肉体的、道徳的および知的改善のために

休みなく働き、彼らの間に私が道徳界の法則とみなすひとつの原理の種子を撒きちらすことができ、そして私の努力の成功を期待しながら、諸氏よ、あなた方の前に彼らの代表としての自分をとにかく見出すことでありましょう」

私の確言は、人も知るようになるか以前にさかのぼるものである。私が願望を表明したとき、まだ若く、確信に満ちていた。仲間の市民たちは、私がそれに忠実であったかどうかをいうだろう。私の社会主義は、ある学会の洗礼を受けていた。私はアカデミーを名づけ親にした。それでも少し前から決まっている私の使命感が弱まっていたとすれば、そのとき尊敬すべき同胞たちから得た励ましは、それを永久に確実にしたであろう。

私はすぐ著作にとりかかった。私は、そのころ存在し、すでに流布しはじめていた諸々の社会主義流派に知識を求めたりなど少しもしなかった。同じように、日々の闘いあまりに没頭して、彼ら自身の思想の結果を考えようとならない政党人やジャーナリストたちにもかまわないでいた。種々の秘密結社のことはそう知らなかったし、また調べもしなかった。すべての人々が、私の追求する目標からは、折衷主義者やイエズス会士ほど遠くかけ離れているように思われた。

私は古代の社会主義者たちを研究することから孤独な陰謀の作業をはじめた。これは、私の意見では、運動の理論的および実践的法則を確定するために必要であっ

た。これら古代の社会主義者たちを、私はまず聖書のうちに見出した。聖書は、キリスト者に向かって語るものでありながら、私にとっても第一の典拠たるべきであった。道徳、衛生、家族および都市との関係という視点から考察した安息日に関する覚書(『日曜礼拝』一八三九)によって、私は、アカデミーから青銅メダルを得た。そこで私は、人々が私に高く寄せた信頼に乗じて純然たる理性の世界にまっさかさまに飛びこみ、奇異な、私としては幸先のないことだったが、早くもモーセを哲学者、社会主義者としたことによって、喝采を博した。今にして思えば間違っていたにしても、その過ちは私ひとりのものではない。かつて彼にそのような魅力があったのか？

だが私はとりわけ実現することのために研究した。アカデミックな栄誉などあまり気にならなかった。学者になるだけの暇はなかったし、まして文学者や考古学者になるにはそうであった。私はすぐ経済学にとりかかった。

究極の帰結にまで押し進めると矛盾に帰着するような原理は、すべて誤ったものと考えて否定しなければならぬこと、また、もしこのような原理が制度を生むならば、その制度自体をも不自然な作り物、ユートピアとなさなければならぬことをもって、私の判断の基準とした。

この基準を準備したうえで、私は、社会において、より古く、より歴大で、より普遍的で、しかも論議される

ことのより少ないものとして見出したもの、すなわち所有を、実験の題目にえらんだ。私の上に何が起こったかは、人の知るところである。長期にわたる詳細な、とりわけ公平無私な分析のあとで、代数学者が彼の方程式によってそうするように、つぎのごとき意外な結論に到達した。所有は、いかなる側面から調べようと、どのような原理に帰属させようと、矛盾した観念である、といううことである。権威の否定を当然にもたらす所有の否定という定義から、直ちに、それに劣らず逆説的な、つぎの必然的帰結を推論した。真の統治形態とはアナトーキである、と。

……私は、私の著作が世人の注目に値し、また学者たちの心づかいを喚起するにはそれだけでは不安であると思つた。私はその覚書を道徳・政治科学アカデミーに送った。アカデミーがそれを快く受け取り、報告者のブランキ氏が著者に讃辞を表しなければならぬと考えられたこと、このことは、私に、アカデミーは私の理論に責任を負わないが、その研究には満足しているものだと思わせ、私は探究をつづけた。

弁証法は私を夢中にした。ある種の狂信、とくに論理学者たちへの狂信が私を酔わせ、私は覚書をパンフレットにすることになった。ブザンソン検事局はこの小冊子に弾圧を加えねばならないと考えたため、私はドゥーブ県重罪裁判所に、所有権に対する攻撃、政府に対する侮辱の煽動、宗教と良俗に対する違反という四つの罪状で

召喚された。私は陪審員に、商業流通の現代において、どのようなにして、使用価値と交換価値とが共通するところのない二つの数量であつて永久に対立しているか、所有はまったく不合理かつ不確定であるか、こうしたことこそは、労働者がいよいよ貧しくなり、所有者がいよいよ豊かになる理由であるかを、全力をつくして説明した。陪審員は私の論証の大事な点は理解できないようであつた。彼らは、私の論証は科学上の事柄であり、したがつて彼らの権限外であると述べ、私のために放免の評決を下した。

所有とは盗奪である

奴隸制とは何か、という問いに答えなくてはならないとしたら、私は、ただ一言で、それは殺人だと答えよう。これで私の考えはすぐに理解されるだろう。私は、人間から思考、意志、人格を奪い去る権力は死を制する力であり、人間を奴隷にするのは人間を殺すことであることを証明するのに、長談議を必要としないだろう。ではこの別の問い、所有とは何かに対しても同様に、それは盗奪だ、とどうして答えてはならないであろうか？ これは、第二の命題が、第一の命題の形を変えたものではないにもかかわらず、理解されまい、と確信してのことではない。

私は、われわれの統治および諸制度の原理そのものである所有を論ずることを意図する。私にはそれをする権利がある。私は、私の研究から出てくる結論において間違っているかもしれない。それも私の権利である。本書の最終の考えを最初にあげておくことにしたい。こうするのつねに私の権利である。

ある著述家は、所有は先占プリオリから生まれ、法律によつて裁可された民法上の権利であると教える。他の著述家

は、所有は労働にその根源をもつ自然権であると教える。これらの教説は、まったく相対立するように見えるけれども、ともに勸奨され、もてはやされている。私は、労働も先占も法律も所有を創出しえないこと、所有は原因のない結果であることを主張する。私は非難されるべきであろうか？

なんと多くのつぶやきが起こっていることか！——所有、それは盗奪だ！と。それは九十三年の警鐘だ！革命的戦闘準備だ！

——読者よ、安心してくれ。私は不和葛藤の主謀者や暴動の火つけ役ではないのだ。私は歴史のいく日か先を見通している。それが現われてくるのを阻止しようとしても無駄な、真実を説明している。われわれの将来の社会構成の序言を書いているのだ。あなたには冒瀆とも思われるだろうが、所有とは盗奪だというこの定義は、もしわれわれの先入主をすててそれを理解することができたら、迷霧をはらす雷ライカウの魔法の鉄棒となるであろう。だが、なんと多くの利害や偏見がそれに反対していることか！ 悲しいことに、哲学というものはすこしも変わらないだろう！ 事件の経過、運命は、予言にかかわらずなく成就するだろう。それに、正義が実現し、われわれの教育が完成してはならないわけがあるうか？

——所有、それは盗奪だ！ 人間の考えのなんたる逆転！ 所有者と盗人とは、それらが示す存在者が相容れないように、つねに矛盾した表現であつた。あらゆる言

語がこの矛盾を是認してきた。いったい君は、どんな権威にもとづいて、あまねく承認されていることを攻撃し、人類を否認することができるのか？ もろもろの民族と時代との理性を否定しようとする君は、何者なのか？

——読者よ、私のとるに足らぬ個性など、あなたにんのかかわりがあるのか？ 私はあなたと同様に、理性が事実と証拠だけに従う世紀の人間なのだ。私の名はあなたと同じく真理の探究者なのだ。私の使命は、憎みも怖れもせず、話し、汝の知ることを語れ、という法の言葉に記されている。われわれ人類の仕事は科学の殿堂を建てることであり、この科学は人間と自然とを包括する。ところで、真理はすべての者に、今日はニュートンやパスカルに、明日は谷あいの牧者や仕事場の労働者に明らかになる。一人一人がその建物に自分の石を持ち寄る。そして自分の仕事が終わると、姿を消す。永遠は、われわれに先立ち、われわれのあとにつづく。この二つの無限のあいだで、この世紀が問い合せている人間の地位とは何なのか？

だから、読者よ、私の肩書や性格は放っておいて、私の議論だけを心にかけてもらいたい。私が普遍的な誤謬を訂正しようとするのは、普遍的な同意に従つてのことなのだ。私が人類の意見に異議をさしはさむのは、人類への信頼からである。勇気をもって私についてきてもらいたい。もしあなたの意志が束縛されていず、あなたの良心が自由であり、あなたの精神が二つの命題を結合し

て第三の命題を引き出すことができるならば、私の考えは間違いなくあなたのものとなるだろう。まず最初に私の結論をあなたに投げかけることによって私が欲したのは、挑戦しようとしてではなく警告しようとしてなのだ。というのは、あなたは、私の書いたものを読めば、同意せざるをえないようになることを確信しているからだ。私が語る事柄はごく単純なわかりきったことだから、あなたはそれに気づいていなかったことに驚き、こういうであろう。「自分は一度も考えなかったのだ」と。ほかの人たちはあなたに、自然の秘密をこじ開け、崇高な託宣をくりひろげる天才の光景を見せてくれるであろう。あなたはそこにただ正義と法についての一連の経験、あなたの良心の重さと量の検証を見出すだけであろう。その作業はあなたの眼の前で行なわれるであろうし、その結果を評価するのはあなた自身なのである。

それに、私は体系というものをつくらない。私が要求するのは、特権の終止、奴隷制の廃止、権利の平等、法の支配である。正義、ただ正義のみ。これが私の所論の要約だ。世界を一定の規律に従わせる仕事は、ほかの者たちに任せよう。

いつか私はこう自問した。どうして社会にはこんなに苦しみや貧困が多いのか？ 人間は永久に不幸でなければならぬのか？ と。そして私は、この一般的困窮について、あるいは権力者の怯懦と無能をとがめ、あるいは陰謀家や暴動を非難し、あるいはまた一般の人々の

理と取りちがえている！……

そこで私は自分の判断の反証をあげようと決心した。そしてこれが、新しい仕事をすることに当たって自分に課した条件であった。すなわち、道徳の諸原理の適用において人類がかくも長いあいだ、またかくも普遍的に間違っていることがありうるのか？ どのようにして、またなぜ、人間は間違いを犯すのであろうか？ その間違いは、普遍的であるため、打ち勝つことができないのではなからうか？

私は、それら問題の解決に私の観察が確かかどうかをかけたわけだが、問題の分析には長くかかりはしなかった。

……そうだ、すべての人々が、条件の平等は権力の平等と同じであり、所有と盗みとは同義語であり、人々の同意を得た、もっと正確にいえば、才能や職務が上だという口実のもとに取得したいっさいの社会的優位は不正であり、強奪であると主張している。まったくすべての人々がこうした真実を心のなかで証言している。それを彼らに理解させることだけが問題なのだ。

自由の到来⁽¹⁰⁾

共同体⁽⁷⁾（意味する）は抑圧と隷従である。人間は義務の掟に従い、祖国に仕え、友人の世話をすることを大いに欲している。しかし人間はまた、自分が好きなことを、

無知と腐敗を責める改革家たちの企てが目ざすいっさいの目的についての説明に心を留めることなく、また演壇や印刷物での果てしない論争にも飽きあきしたので、自分で問題を深く研究することにした。私は学問の大家たちの意見を聴き、哲学、法学、経済学、歴史に関する多くの書物を読んだ。そしてこんなにも多くの書物を読むことなど無用であるような世紀に生きているのであったらよいと思った。私は、諸学説を比較し、反対論に対しては回答し、たえず数多の議論の等式と帰結をつくり、多数の三段論法を最も綿密な論理の罫にかけて吟味し、正確な知識を得るためのあらゆる努力をつくした。この骨の折れる道程で多くの興味ある事実を収集したが、そうする暇が得られたら、すぐにもそれらを友人や公衆に分かつてあろう。だがわれわれは、かくもありふれた、そしてかくも神聖な、正義、公正、自由という言葉の意味をかつて理解しなかったこと、これらの一つ一つについてのわれわれの観念が曖昧であったこと、最後にこの無知こそはわれわれを貪りつくす貧困と人類を苦しめるすべての禍いの唯一の原因であったことを、まず認めなければならぬ。

この奇妙な結論に私の精神はすっかり驚いた。私は自分の理性に疑いを抱いた。お前は眼で見もせず、耳で聴きもせず、知性が探り出しもしなかったことを、発見したといっているのではないか！ と私はいった。とんでもないことに、病気の頭で描いた幻を科学の輝かしい真好きな時、好きなだけやることをも欲している。人間は自分の時間を自由に使い、必要なことだけに従事し、友情、気晴らし、訓練を自分で選択し、卑屈な責務からでなくエゴイズムから自分を犠牲にしようとする。共同体は本質的にわれわれの能力の自由な発揮、われわれの最も高貴な諸傾向、われわれの最も内奥の諸感情に逆らうものである。共同体を個人的理性と意志との要求に合致させようとして人々が考えることのすべては、ただ名称を保持しながら事柄を変えることに帰着するのであろう。われわれは、もし誠実に真理を探究するのであるならば、言葉の論争は避けなくてはならない。

かくして共同体は意識の自主性と平等とを侵害する。前者に対しては精神と心情の自発性、行動と思考における自由意志を抑圧することによって。後者に対しては労働と怠情、才能と愚鈍、悪徳そのものと徳とに福利の平等を報いることによって。

……われわれはどのような形態の政府を選ぼうとするのか？

——ああ！ そんなことをたずねるなんて、あなたは共和主義者だ、と必ずや私の若い読者のだれかが答えるだろう。

——共和主義者、そうだ。だがこの言葉は何もはつきりしたものを示していない。Res publicaとは公けの物事のことだ。ところで、どのような形態のものにおいてあれ、公けの物事を欲する者は誰でも、自分は共和主義

者だといふことができる。国王たちもまた共和主義者だ。

— それじゃ！ あなたは民主主義者でしょう？

— そうではない。

— なに！ では君主論者でしょう？

— そうでもない。

— 立憲主義者？

— ともでもない。

— では貴族主義者でしょう？

— 全然そうではない。

— あなたは混成政府を望むのでしょうか！

— なおさらそうではない。

— ではあなたは何なのですか？

— 私はアナキストだ。

— わかりました。あなたはあてこすりをしておられる。これは政府に向かつていふべきことでしよう。

— 決してそうではない。あなたは私の真実の、よく考え抜いた信条の告白を聴きに來られた。私は、はなはだ秩序の友でありながら、その言葉のあらゆる意味でのアナキストです。私のいうことをきいてもらいたい。

— ……人間は、自己の欲求を最も速かにまた最も完全に充足するために、規準を探索する。初めには、規準は人間にとって生きた、眼に見え、手で触れることのできるものである。それは彼の父であり、主人であり、王である。人間が無知であればあるほど、指導者に対する彼の服従や信頼はいっそう絶対的である。しかし、規準に従

ば編み合わされる時がくる。彼は、王位に就きながら、自分は慣習と仕来りにして統治しているのであり、自分を抜きにして法律を制定する社会の執行権力にすぎないことを、誓約することを余儀なくされてくる。そうなるまでは万事が本能的に、いわば無意識的に行なわれている。だがこうした動きの致命的結末を見るところ。

人間は学習し、観念を取得することによってついに科学の観念、すなわち事物の現実に合致し、その観察から引き出される知識の体系についての観念を獲得するようになる。かくして人間は科学、すなわち無機物の体系、有機体の体系、人間精神の体系、世界の体系を探究する。どうして社会の体系をも探究しないわけがあるか？ だがこの時機に達すると、人間は、政治の真理または科学は、主権者の意志、多数者の意志、民衆の信念からまったく独立のものであること、国王も大臣も司法官も国民も、意志として存在するがきり、科学にとつては何ものでもなく、いかなる考慮にも値しないことを理解する。彼はまた同時に、人間が生来社会的であるならば、彼に對する父の權威は、彼の理性が形成され、彼の教育が終了して彼が父の仲間となる日には、無くなること、彼の眞の首長、眞の王は証明された真理であること、政治は科学であつて小細工ではないこと、立法者の職能は結局真理の方法的探究に帰着すること、これらのことがわかつてくる。

うこと、すなわち反省と推論とによつて規準を発見することを自己の定めとする人間は、首長の命令についても推論する。ところで、そうした推論は權威に對する抗議であり、不服従の始まりである。人間は至高とされる意志の動機を詮索する時から、叛逆者だ。王が命令するからではなく、王が証拠立てているからという理由でしかもはや服従しないならば、その人はそれ以後いかなる權威をも認めず、自らを自己の王となすものと確言することができる。あえて彼を指揮しようとし、己れの法則を承認させるために、多数者への尊重しか提供しない者は禍いだ。なぜなら、少数者は早晩多数者となるだろうし、多数者というこの軽率な専制者は覆され、彼の定められた法律はいっさい廃棄されるだろうからだ。

社会が啓蒙されるにつれて、王の權威は縮小する。これはすべての歴史が実証する事実である。諸国民の創生にさいしては、人々は無駄に反省し推論した。方法も原理もなく、自分たちの理性の用い方さえも知らなかった。彼らはものを正しく見ているのか、間違っているのかもわからなかった。當時は王の權威が絶大であつて、既得のどんな知識もそれに反論するまでには至らなかった。しかし経験は少しずつ習慣を生み、習慣は慣習となる。ついで慣習は格率に定式化され、原理として確立され、要するに法律に移され、この法律に對して生きた法律たる国王も、敬意を表せざるをえなくなる。やがて慣習と法律とが増加し、君主の意志が一般意志にいわ

かくして一定の社会における人間の人間に對する權威は、この社会が到達した知的発達に反比例し、またこの權威が存続する見込みは、眞の統治すなわち科学に依拠する統治に對する多少とも一般的願望によつて計ることができ。そして力の法と策略の法とが正義のますます広範な確立の前で制限され、ついに平等のうちに姿を消さねばならなくなるのと同様に、意志の主権は理性の主権の前に讓歩し、ついに科学的社會主義のうちに消滅するであろう。所有と王制とは世界の当初から倒壊しつつある。人間が正義を平等のうちに求めるように、社会は秩序をアナキーのうちに求めている。

アナキー、主人、主権者の非存在、これがわれわれの日々に接近していく統治形態である。しかも人間を規準となし、その意志を法則とみなす根深い習慣は、アナキーをもつて無秩序の極致およびカオスの表現とわれわれに思わせている。十七世紀のバリのあるブルジョアが、ヴェネチアには国王などという者は存在しないことを聞いて、その驚きから氣を取り直すことができず、そのように滑稽なことについての最初の知らせに笑い死にするかと思つたという話がある。われわれの偏見たるや、かくも根強いのだ。われわれはいまのようであるかぎり、すべての者が一人または数人の首長を望んでいる。私はいまここに一つの小冊子をもっているが、熱烈な共產主義者であるその著者は、もう一人のマラーのように独裁を夢みている。

……共同体と所有とのこの綜合を、われわれは自由と名づけよう。

したがってわれわれは、自由を規定するのに、共同体と所有とを無差別に結び合わせはしない。それは不合理的な折衷であらう。われわれは、分析的な方法によってこのそれぞれが、自然の要求と社交性の法則とに合致しながら真に含んでいるものを探し出し、異質の要素は除去し、その結果は人間の社会的な自然な形態、要するに自由に適切な表現をあたえるものである。

自由とは平等である。なぜなら、自由は社会状態においてのみ存在し、平等を抜きにして社会は存在しないからである。

自由とはアナキーである。なぜなら、自由は意志の統治を認めず、ただ法則の權威すなわち必然性しか認めないからである。

自由とは限り無い多様性である。なぜなら、自由は法則の限界内であらゆる意志を尊重するからである。

自由とは釣合である。なぜなら、自由は功績への野心と榮譽への競争にあらゆる活動の余地をあたえるからである。

……自由は本質上組織的である。人々の間の平等や国民の間の均衡を確保するためには、農業と工業、教育、商業および倉庫の中心が各地方の地理的および気象的条件、生産物の種類、住民の性格や生来の才能等々に応じ、いかなる地域も人口や消費や生産物に関し決して

経済的諸矛盾の体系

……社会の革命についての知識を取得するためにまず最初になすべきことは、社会のもろもろの二律背反の全系列、その諸矛盾の体系をうち立てるに在ることを私は理解した。

本書を読んでいない人たちにその大體を伝えることはわずかしらに思われる。それにしても私は、今日すべての人々に理解されている言語を用いて、いくつかの書物の趣旨を伝えることを試みるであらう。というのは、私が真の経済学的方法と考えるものについて純粹な観念を大體なり示すことができたならば、やがてあらゆる人々にそれを信奉させずにおくことは難しいからである。

既成の秩序を正面から攻撃した私の初期の覚書では、私はたとえば、所有とは盜奪である、と述べた。もろもろの制度の無価値なことに抗議し、いわばそれをきわ立たせることが問題であった。当時それ以外のことは念頭になかったのである。そのため、 $\mu + \nu$ というやり方で、この人をびっくりさせた命題を論証した覚書では、いっさいの共産主義的結論に抗議することに意を用い

過剰も不足も生ずることがないように、正しい、学問的な、よく組み合わされた比率において配分される必要がある。ここに公法および私法の科学や真の経済学が始まることになる。

……政治学は自由の科学である。人間に対する人間の統治は、いかなる名称を装おうとも、抑圧である。社会の最高の完成は、秩序とアナキーとの結合に存する。

古い文明の終末は到来した。新しい太陽の下で地の面が更新しようとしている。一つの世代など砂漠で亡びるがままにしよう。旧来の背任汚職の徒は砂漠で死滅するがままにしよう。聖なる大地は彼らの骨を覆い隠しはしないであらう。世紀の頽廢に憤激し、正義への熱意に燃える青年よ、もし郷土が君に貴重であり、人類への関心が君の心を動かすならば、あえて自由の大義を信奉し給え。君の古いエゴイズムを脱ぎ棄て、生まれつつある平等の民衆自身の流れに身を投げ給え。そこから、君の鍛え直された心は精氣とそれまで知らなかった活力を汲み取るであらう。柔軟になった天分は抑えようのないエネルギーを再び見出すであらう。おそらくすでに衰えていた君の心は若返るであらう。君の浄化された眼にはすべてが様相を一変するであらう。新しい感情が君の裡に新しい観念を生み出すであらう。宗教、道德、詩、芸術、言語が、より大いなる、より美しい形で君の前に現われるであらう。こんごも君の信条を確信し、熟慮反省をもって熱狂しながら、君は普遍的再生の黎明を迎えるであらう。

『経済的諸矛盾の体系』では、私は、最初の定義を想起し確認したあとで、それとまったく逆の、しかし別の次元の考察にもとづき、先の立論を破ることもまたそれによって破られることもありえない定義、所有とは自由である、をつけ加えた。所有とは盜奪である、所有とは自由である。これら二つの命題は、『経済的諸矛盾の体系』において相並んで等しく論証され、ともにその有効性を保持している。

私は、各経済的カテゴリー、分業、競争、国家、信用、共同体等々についても同様に扱い、これら観念のそれぞれが、したがってまたそれらが生み出す諸制度が、どのようにして積極的側面と消極的側面とをもつか、どのようにしてまったく相対立する結果の二重の系列をひき起こすかを次々に論証した。そしてつねに合致、和解または綜合の必要なことを結論した。したがって所有はここでは、他の経済的諸カテゴリーとともに、その存在の理由と非存在の理由とをもって、すなわち経済・社会体制の表裏二面の要素として現われたのである。

このことは、こう説明したのでは詭弁的で矛盾し、曖昧と悪意とで傷つけられるように見えた。所有を例にとつてそれをもっとわかりやすくしよう。

所有は、社会諸制度全体のなかで考えるとき、いわば二つの当座勘定をもっている。一つはそれが取得させ、その本質から直接生じる富の勘定である。他はそれが生

み出す不便不利な物事、それにかかり、また富と同じくその本性の直接の結果として要する費用の勘定である。競争、独占、国家等々についてもこれと同じである。

所有においては、すべての経済的要素におけること、悪用または濫用は善用と不可分であり、それは、複式簿記において、借方と貸方が不可分であるのとまさに同様である。その一方は必然的に他方を生み出す。所有の濫用を除去しようとするのは、所有そのものを破棄することである。これと同様に、計算書の借方の項目を削ぐことは、貸方の項目を破棄することである。所有権の濫用もしくは不利不利益に對抗してなしようすることのすべては、それに対して、債権者が債務者に対し、株主が合資会社の無限責任社員に対する関係等々（これがたとえば共同体の場合であろう）に当たる、反対の要素と所有を融合させ、総合し、組織しもしくは均衡させることである。このようにして、二つの原理が変質し、互いに破壊しあうことなく、一方の原理の善が他方の原理の悪をかばうことになる。それは、貸借対照表において、双方が、互いに清算したあとで、丸損か丸もうけかの最終結果になるのと同様である。

それゆえ、貧困の問題の解決は、会計学をより高い表現にまで高め、社会に関する簿記を整備し、もはやふつうの簿記の諸項目、資本、基金、一般商品、手形、割引等々ではなく、法の哲学および政治学の諸術語、競争と独占、所有と共同体、市民と国家、人間と神等々を、社

るにかかわりなく、アナキーにどうしようもなく反感を抱き、それを無秩序ととっている。それは、あたかも民主主義が権力の区分以外の方法で実現され、民主主義という言葉の真の意味が、政府を罷免することではないかのようなのである。

……社会において二律背反の理論は、あらゆる運動の表現であると同時に基礎である。習俗と制度は民族によって異なり、これは職業と機械が世紀により、都市によって変わるのと同様である。それらの進化を支配する法則は、代数のごとく不撓不屈である。労働によって集団化された人々が存在するところではどこでも、市場価格の観念が根つき、産業の分立のために通貨と生産物の流通がおこなわれているところではどこでも、恐慌、欠損、社会の自己自身に対する破産、また貧困とプロレタリアートの増大を招くまいとするならば、すべての個人的理性と同じく集合的活動のあらゆる発展に固有な、社会の二律背反の諸力は、不断の均衡のうちに保持されなければならない。そして社会と個人との根本的対立によってつねに再生産される敵対関係は、つねに総合にまでもたらされなければならないのである。

会という原簿の総勘定または区分とすることによって、各制度の貸方と借方とを確定することに存するのである。さいごに、また私の比較の終わりとして、日々記帳すること、すなわち、いついかなるときでも整理が不整理かを確認し、差引残高を示すことができるように、貸方と借方を正確に明らかにすることが必要である。

私は二巻の著書をあてて、人がそうよびたいなら、超越的ともいえるこの簿記の原理を説明した。私は二月以来、簿記と形而上学とに共通する、これら初歩的な観念を百回も思い出した。旧式の経済学者たちは私を嘲笑した。政治的イデオログたちは私に民衆のために書くように丁寧にすすめた。私が心にかくも強く関心を抱いていた人たちはどうかという、彼らは私をいっそうひどく扱ったのである。

共産主義者たちは、私が共同体に対して批判し、国民とはあたかもポリブ母体（ドラ群体など）のごときものであり、社会権のかたわらには個人権は存在しないとしたことで、私を容赦しない。

所有者たちは、私が、あたかも所有はそのすべての価値（利得）を生産物の流通から引き出すのではなく、したがってそれに優るある事実、すなわち集合力や労働の連帯に依存するものでないかのごとく考え、それがただそれ自体として盜奪であると述べたものとして、私に死の苦しみを与えようとしている。

一八四八年革命におけるブルードン

一八四八年の革命は政治革命であり、まだためらい混然したものであったとはいえず、社会的内容をもふくんでいた。ブルードンは革命に胸を引き裂かれる思いがした。アナキストであり、非政治的である彼は、そのなかであたかも外人部隊のような危険を冒した。しかし彼は情勢上やむなくしてジャーナリスト兼国会議員となった。彼は、否でも応でも革命に参加せざるをえなくなったのである。

二月の民衆の爆発の前には、彼はほとんど沈黙していた。彼は、王制が終末に近づいていることを予感したが、しかしその倒壊を目ざして事をなしはしなかった。ルイ・フィリップの反対者たち、「あわれな民主主義者たち」に対しては、ただいやみをいうだけであった。「フランスの民衆にやってくるかもしれない最大の幸福は、反対派の代議士百名を首に石うすをつけてセーヌ川に投げこむことだろう。彼らの値うちには保守家連より百倍も劣っている。この連中よりもっと偽善が多いからだ」。彼はついにはギゾー政府が公けの集會を禁止したのを当然と思うようになつた。あとで自ら認めたように、共和制が近づくとが彼を怖れさせたのである。

共和制の到来はまず初めに彼の肝をつぶし、彼は「共和制の葬儀と社会主義を襲おうとしている誹謗中傷の重荷」とを前もって引き受ける。だが彼はたちまちにして立ち直り、革命を受

けられる。彼はその「手帳」に記している。「今日の勝利は権威に対するアナキーの勝利である」。しかしすぐにまた不安が起こってくる。……「それとも瞞着かだ」。「達成された結果は取り返しのつかない混乱であり、あとを振り返るのは愚かなことだ。私は二月二十四日の革命に加わりはしなかった。民衆としての本能が別のことを決心させたのだ。……私はすべての人たちといたしよだ」。「どんなことが起ころうと、民衆は私によって正視されるだろう」。「諸君は革命を欲した。諸君は革命を達成するだろう」

ブルードンの不安は、社会革命に対する彼のリベルテールの見解に由来したが、事件の成行はこれを十分に実証せざるをえなかった。「社会革命は、政治革命をおしてやってくる場合には、直ちに危殆に瀕する」と彼は一八四五年すでに記した。またその後、こう書きとめた、「プロレタリアートの掌中の権力……、これは、社会革命が達成されない間は、障害であるだろう」。回顧的には、彼はこう認めるであろう。「私は二月の強襲に突き進まなかった一人の革命家である。……この間の不一致は全面的であった。彼らは何よりも政治家であった。彼らは一七九三年革命の伝統を継続し、「政府の発意によって真の社会を建設する」ことを意図した。彼らは、ブルードンが欲したように「革命を下から提案するかわりに、革命を上から強制する必要性」を宣言した。アナキズムの創設者は力強くこう確言したのである。「社会主義は、資本に対する抗議であるという、まさにそのことによって、権力に対する抗議である。……ここで、モントーニュ派は権力によって社会主義を實現しようとし、もっと悪いことには権力に達するために社会主義

を利用しようとした」

政治革命は不可避免的に、労働者の圧力の下に、民主主義者たちがなら解決の準備をしていなかった社会問題を提起した。「上にいる者も下にいる者も、誰ひとりとして理解する者が無いに、社会革命が生起した。……革命、共和制、社会主義が互いに支持し合いながら急ぎ足でやってくる。……政治秩序に起ころうとしていた革命は、社会革命の発足の日付であったが、これについて知る者は誰もいなかった」

ブルードンのほかには誰も。彼は一八四六年以来あるはつきり決まった考えを抱いていた。それは「決定的な革命」、「経済革命」に乗り出すことがまさに彼のなすべきことだという考えである。彼は彼なりの「社会問題解決」をもっている。これは相互主義組合であり、今日自主管理とよばれるものである。「革命とは、私だ」と彼はその「手帳」に書いている。彼が提唱する万能薬は現実主義とユートピアとの奇妙な混濁である。資本主義と国有化を同時に遠ざける唯一の手段としての労働者生産組合の増殖を説くときは、現実主義である。彼のシステムがひろがっていき、ついには、国家のいっさいの出資の外部で機能する相互金庫のごとき「庶民銀行」をおして、労働者組合に認められる無償信用の力で、全産業を暴力的取用なしに漸次に没収すると考えるときには、ユートピアである。

しかし政治はブルードンをこのパラドックスから離脱させる。初め四月の選挙には破れたが、四八年六月四十五日の補欠選挙に七万七千票で代議士に当選した。数週にして早くも彼は激しく叫んだ、「普通選挙は反革命だ」。この先(六四一)で見られるように、彼はこう認めるであろう。「社会における国家の役割、権力の従属および政府の革命的無能力について、十年

来、語り、書き、発表してきたものすべてについて考えたとき、私は、一八四八年六月の私の当選は、一部の民衆の誤解の結果であったと、信じたい気になっている」

それから十五日後には場末の町の労働者たちが、失業救済の目的でにわか設けられた一種の労務所たる国立仕事場の解体に抗議して蜂起する。しかしブルードンは国会議員としての彼の役割をあまりに重大に考えた。「私にとっては、六月の日々の記憶が良心の呵責のように心につまでも重く感じられるであろう。……私は議院の麻痺によって代議士としての私の義務を欠いた。私は見るためにそこにいたが、見なかったし、警報をならすためにいたのに、叫びもしなかった！」

しかし、サン・タントアヌ町の騒動がカヴェニャク將軍の軍隊に弾圧されたとき、ブルードンは街頭に降りていく。彼はパステイユの場所に行く。質問する者にこう答える、「私は一斉砲撃の崇高な恐怖には耳を傾ける」。恐れおののいたブルジョアがヒステリー的な叫びを発している間に、彼は人々に蜂起した者たちを中傷しないように要求する。彼は労働者階級の寛大さや高潔の道徳性を称揚する。「六月の闘士たち……、諸君は、権力の名で、権力が守りえなかった約束をした者たちをだましたのだ」

六月の日々のあと、ブルードンはもはやまるつきり同じ人ではない。彼は階級の言葉語る。彼は彼の社会主義を攻撃的に宣言する。七月半ばから彼は乱闘のなかへはいっていき、議会の演壇を独り占めして、それを社会闘争の道具とする。「思いあがってかのかのほせてか」と彼は記した、「私は自分の番がきたと思ひこんだ。混乱のなかに飛びこむべきだと思った。私は見物席から新入りの俳優として舞台上に飛び下りた。彼は一つの

法案を提起するが、それは金持を打ち、同時に貧乏人たちの負担を軽減しようとするものである。すなわちいっさいの所得に對する三分の一の課税といっさいの小作料の三分の一の支払猶予である。この提案は一般の怒号を喚起する。ブルジョアジの代弁者ティエール「氏」はブルードンを罵倒する。七月三十一日、ブルードンは議会の大演説で弁明する。妨害と罵言に激怒して彼は挑戦的になる。彼は「所有の社会的清算にとりかかるように」督促し、こうつけ加える。「これを拒否する場合は、われわれ自身、諸君にかかわりなく清算に着手するだろう(荒々しいざわめき)。そして彼は妨害者たちを抑えて言い返す。「私はわれわれというときには、自分をプロレタリアートと同一視し、諸君というときには、諸君をブルジョア階級と同一視しているのだ」

一代議士——「これは社会戦争だ！」

演説はつぎの言葉で結ばれるが、これは放火犯人のいうことと判断される。「資本は二度と戻ってこないだろう。社会はそれを監視しているのだ。ブルードンはこう注釈するだろう。「いおうとするのは、社会問題が提起されているということだ。諸君はそれを解決するか、それとも結末をつけることがないかどうか」。「演壇で話したのはもはや私ではなく、すべての労働者だったのだ」

議場のこのような挑戦的侮辱が喚起した憤激たるや大きなものであって、ブルードンの提案は六百九十一対二というほとんど満場一致で否決され、賛成票は彼とグレップポなる人の票とであった。ブルードンはさらに情熱をこめて注釈する。「七月三十一日から私は、あるジャーナリストの表現によれば、恐ろしい人物となった。……私ははめそやされ、ばかにされ、歌

にして諷刺され、貼紙に貼り出され、伝記を作られ、漫画にされ、非難され、侮辱され、呪われた。……信心家たちは匿名の手紙で神の怒りをもって私を脅迫した。信心深い婦人たちは聖牌を送ってよこした。……私をその資格のない者として追放するよう要求する訴えが国民議会に送達された」

一八四八年九月十七日の補欠選挙は、ブルードンにはつきり革命的な立場をとる新たな機会を提供した。彼はもう一度、普通選挙に対する彼の嫌悪を抑え、自分の新聞でフランソワ・ヴァンサン・ラスバイユを候補者として支持した。植物学や有機化学の研究で著名な学者で、カンフル療法の専門家であるラスバイユ（二七九四—一八七八年）は、「貧乏人の医者」となり、一八四六年には違法な医療のかどで起訴されたことがあった。一八四八年二月二十四日には、彼は、まっさきに市役所へ乗りこんで、共和制を宣言した人々の一人であった。ついで彼はいつさいの公職を拒否し、新聞を創刊して臨時政府をはげしく批判した。彼はオーギュスト・ブランキの側に与し、五月十五日にブルボン王宮に侵入し、議会の解散を宣し、市役所に束の間、叛徒の政府を樹立した民衆クラブの有力な示威運動の鼓吹者の一人であった。同じ日の夕刻、ラスバイユはバルベおよび数人の人々とともに捕えられ、ヴァンサンヌの堡壘に幽閉された。

したがって、補欠選挙のさい、セーヌ県の選挙民の投票にかげられたのは、囚人であった。ラスバイユは堂々と当選した。「社会主義」とブルードンは語るであろう、九月十七日の選挙をやったのだ。すべてが一致して選挙を粉砕しようとしたとき、七万の人々が六月勝利に対する抗議の訴えに立ちあがり、ラスバイユを代議士に選出したのである。民主派の選挙委員会が集会を開いたのは民衆の事務所においてである。節度のない

反動に対抗して民主派は、最も精力的な機関紙をその旗印とした。……問題はもはや君主制と民主制とのあいだにではなく、労働と資本とのあいだにあった」

それから数週間後、ブルードンはある宴会の席で反響の多い「革命への乾杯」（一八四八年十月十七日の）ことを伝えた。彼はそこで断乎として「民主主義者」という名称に「社会主義者」という名称をつけ加え、こんごは「共和主義を社会主義から引き離し」えないことを確言した。「自ら、仲介者なしに活動する民衆のみが、二月に確立された経済革命を完成することができる」

しかし六月の蜂起とその恐るべき弾圧とは、たんに前衛分子を急進化させたばかりでなく、なおまたそれにもまして反革命派を刺激した。セーヌ県を除いて補欠選挙は、保守派に有利であった。ナポレオンの甥に選ばれることに成功した。それ以来二月十日の大統領選挙への彼の立候補が確定されたのである。この選挙でもブルードンは、もう一度——ラスバイユの立候補を奨めた。彼の新聞は初め棄権を勧告したが、ついで白紙投票を奨励した。ルイ・ボナパルトにはすでに六月の殺人者カヴエニャク將軍、ブルジョア民主主義者のルドリュ・ロランが挑戦していた。ラスバイユを候補に立たしたところでないだろうか？

ブルードンは説明している。「ラスバイユの立候補の理由はまさにルドリュ・ロランの立候補にあったのだ。ルドリュ・ロランに投票することによって、「民主主義は政府中心主義の理論に与することを表明し、もはや社会主義的ではなくなった。……来たるべき抗争の名譽のために、民主主義の内部から抗議が生起しなければならなかったのだ」

フランスの地方、とくに田園地帯を吹き払っていた反動の浪のなかでは、ルドリュ・ロランの立候補にはチャンスはまったくなかった。しかしブルードンは説明している、よし「成功のチャンスは最小であったにしても、失敗いかんはわれわれにかかっており、われわれが失敗させたのだ」。ラスバイユの立候補は、二月革命以来その権力行使において破産したブルジョア民主主義者に対する不信の表明であった。

結局のところ、ルイ・ナポレオンが圧倒的多数で当選した。ブルードンはこの驚くべき結果をつぎのことばで注釈した。「フランスはルイ・ボナパルトを共和国大統領に指名した。それは、フランスが政党に飽きあきし、政党という政党がみな死んでしまったからだ。また彼は、カヴエニャク將軍が喚起した正当な恐怖が、さらに「大部分の民主主義者をナポレオンのほうに駆りたてた」と説明するであろう。革命は息を引き取ったのである。

新体制はすぐにブルードンを投獄した。かくしてブルードンは、革命失敗の教訓をいつそら根底的に引き出す暇をえた。これは一八四八年には、「すべての原理と同じく現実よりもむしろ理想を示す」アナキーにまでいくのではないにせよ、少なくとも国家的中央集権化を攻撃する機会であった。市民たちは「彼ら自身を自己のものとするように差し向け」られるべきであった。人々は、「彼らの物事の管理、彼らの警察の仕事、彼らの資金および軍隊の処置を県および自治体に」返還すべきであった。

この最低限のことを実現しないなら、「革命を語ることは偽善であった」。しかし一八四八年の人々は、「現に一般的な偏見と、最も偉大な天才たちをも悩ませるこの未知なものへの恐怖

とに引き止められて、あえて革命を語りはしなかった。「政治問題は……国民議会に帰属することになった。以来、問題はそこでは埋没されるものと予想することができた。そこでは、民衆は未成年であるから、彼ら自身の協議には任せえないということが、言わずして理解されていた。政府中心主義が、いっそう力強く擁護されていたのである。「政府の過誤、きわめて大きな過誤は……崩壊するのを知らなかったことである。権力を武装解除し」、政府から「爪と歯を引き抜き」、「軍隊の半数を解散し、部隊を首都から遠ざけなくてはならなかったのだ。そうするかわりに、政府は志願兵からなる二十四大隊の国民軍遊動隊を召集した。「いったい政府はこれら兵士のすべてをもつて何をしようとしたのか。六月がこれをわれわれに知らせてくれるであろう」

ブルードンとしては、一七九三年の先例からリベルテールの結論を推論していた。「もうもろのクラブを組織することが必要であった。民衆の諸結社の組織こそは、民主主義の軸であり、共和制秩序の礎石であった。「民主主義権力が尊重すべき、また尊重するだけでなく発展させ組織すべき制度があるとすれば、それはクラブであった。「二月革命の翌日には万事が逆の意味にとられた。……権力を民衆の意志に従属させることによつて、民衆にその自発的な豊饒力を返すかわりに、彼らは、時が（まだ）大衆に明らかにしていない諸問題を、権力を用いて解決しようとする。」「革命の精神を失った臨時政府は……無駄な暗中摸索と煽動と回状とに何日も何週間も無駄にした。「輿論のいぶきに押されて政府は何人かの発意を利用してようと努力した。悲しむべき発意よ！」いくらかの少数ない積極的な方策を別にすると、「あとはただ道化と誇示と誤解とば

からしきだけであった。権力は才気ある者たちをも愚鈍にする、と人々はいった」

そしてブルードンは、一九三六年の人民戦線政府の連中のような、合法性の圏内にとどまるという考えしかもたない人々をめった打ちしようとする。彼らの野心すべては……忠実な事務員のように、正しい報告をすることであった。九三年の記憶に責められ、……社会秩序の破壊者とみなされることも国民主権を奪い取ることも欲しない彼らは、秩序を維持することに甘んじむ。……彼らは、合法的な道から出て……民衆を革命に投げこむなら、彼らへの委託に背くものと信じていた。革命は国家を解体しようとし、民主主義とはアナキーのことだといふらされた。……彼らは、富者に対して合法外の即決的な手段に訴えるよりも、……政治の場に律義をつくした。……彼らは、名譽心と疑念とでいっぱいであり、……「合法性の奴隷、民主主義の貞潔の不変な擁護者であった」。彼らは、コレット・オードリがレオン・ブルムについて書いたように、「正義の士」であろうとした。彼らは「繊細さを瑣事にまで、人間、意見、利害の尊重を」自己の「犠牲にまで」押し進めたのである。

一八四八年の破産者たちのうちでブルードンが最も好意を抱いたのは、ルイ・ブランであった。ルイ・ブランは、ブルードンの見るところでは、すべての人々のなかで一番責任があった。というのは、彼は「社会主義」を自負していたからである。一八四八年三月十七日、ルイ・ブランは民衆の最初の、十万以上の労働者を集めた大々的な示威運動の組織者の一人であった。しかるに彼は、運動が政府を督促して共和制をサボル者たちに対してもっと精神的に行動するように向かうのを妨げた。ブルードンはルイ・ブランのこの変節を容赦できなかった。

ランスの勝ち誇る軍隊を先頭にしてヨーロッパの諸国民にもたらすことを語っていた。私は退いて困難な研究をつづけるほうがもっと有益と考へ、これが革命に役立つ唯一の手段であり、臨時政府も新ジャコバン派も私に先んずるものではないことを確信していた。

……私の学派では私だけが旧派経済学の斜面に墮落を掘っているあいだ、P・ルルー、ヴィルガデル、ヴィダル、および若干の他の人々が、少しちがう方向でこの学問的な破壊を進めていたあいだに、民主主義の代弁者たちは何をやったか。彼らがやったこと？ ああ！ 社会主義者たちだけが共和制の不幸に責任を負うことがないように、彼らにも自分たちのやったことを思い出させるのを許してもらおう。彼らはその議会制への偏見に没頭した。彼らは、その新聞や雑誌の購読者をおびえさせることを恐れて社会問題をかたく避けて、二月革命で人々を瞞着することを準備した。彼らは、こうした意図的な怠慢からして国立仕事場を組織し、臨時政府の諸法令の原案を作成し、それと知らずして中庸穏和な共和制の基礎を築いた。『ル・ナンシヨナル』紙は、私はこれにそれ以上を望まないが、社会主義を憎み、パリの防備を投票で可決させた。『ラ・レフォルム』紙はその善意に力を得て普通選挙とルイ・ブランの政府中心主義とに固執した。人々はユートピアを、未熟のうちに引き抜かねばならないのに、伸びるがままにした。

……革命は立ちどまりも一朝にして成就もしないこと

「なんだ！ これが、権力者やその仲間が進歩の敵であり、彼らを取り代えなければ革命は危殆におちいると確信していた人間か。彼は、機会はめったになく、ひとたび逃がすとはや戻らないこと、決定的な打撃を加えるにはただの一瞬しかないことを知っていた。しかるにこの瞬間がきたとき、彼は、それを正しく利用して、それに献身し手助けする人々を押し返すのだ！」そして自分の苦い回想に結末をつけるために、囚人は胸もむかつく警句を洩らす。「革命は桶のアルコールのように蒸発した」

しかしブルードンは一八四八年の革命から、それを難破させて掠奪した人々に対するような厳しい批判を引き出しただけではない。革命は、このさき（七五ページ以下）で見ると、国家と権力一般に対する力強い独創的な糾弾を加えることを彼に鼓吹せずにはいなかったのである。

乱闘に身を投ずるブルードン

二月革命は勃発した。私はこの政治的・社会主義的混乱に身を投ずる考えはいささかもなかったし、それに人もそう思っていた。この混乱のなかで、ド・ラマルテイヌ氏は外交上のありふれた話題を詩的散文で言い表わした。人々はすべての商業、すべての工業、やがてはすべての農業を次々に組合化して管理下におき、またいっさいの所有物を買戻して行政的に経営し、資本と能力を国家の手に集中し、ついでこの統治体制を、わが

わが政治家たちに納得させるには、二月革命の経験がいぜん必要であった。

……かくして民主主義は、まさにそれを分配することによって無効にしてしまうことを目的とする権力を追求して、われとわが身を滅ぼした。党のすべての分派が次々と倒された。執行委員会は罷免され、われわれは明日の共和主義者に与し、空論家たちに近づいた。人々がこうした後退を企てることに、あるいは少なくともそれを憲法の枠内に閉じ込めることに成功しなかったら、共和制は危殆に瀕しただろう。しかしこのためには策略を変えなくてはならなかった。反対党としての立場を確立し、権力を守勢に退かせ、戦場を拡大し、社会問題を一般化することによって単純なものにすることが必要であった。大胆な提案によって敵を驚かせ、こんごは彼らの代表ではなくて民衆自身に働きかけ、反動の盲目的な激情に手心を加えずに二月の哲学的革命的理念を対立させなくてはならなかった。

政党はこの戦術をとる用意が少しもできていなかった。それには断乎たる、風変わりでさえある個性、抗議と否定とに練られた魂が必要であった。自惚であれ逆上であれ、私は自分の番がきたと思ひこんだ。騒乱のなかにとびこむのが自分の仕事だと私は自分に言いよらせる。われわれの光栄ある革命の記憶に心を引きよせられている民主主義者たちは、一八四八年に一七八九年のドラマを再演しようとした。彼らが喜劇を演じているあいだ

に、歴史を形成する努力をしよう。共和制はもはや神の加護のほうにしか向っていない。盲目の力が権力のある方向に引きずっていくあいだは、われわれは社会を別の方向に押し進めえないのであろうか？ 精神の方向が一変した上は、政府は、反動の役割をつづけながら、それと感づかずに革命のために働くことになるであらう。そして私は、見物席から新米の俳優として舞台上に飛び降りたのである。

私の名は十九カ月このかた人の噂に十分上っていたので、私の高名について何か説明したり口実を設けたりしなくても人は大目に見てくれよう。よかれ悪しかれ、私は国の運命に私なりの影響をおよぼしたのである。この影響は、圧迫されたこと自体のために今日いっそう強力であって、さらに何を生み出すかはだれにもわからない。それゆえ、私と同時代の人々が、私が欲したこと、私が生じたこと、私はどんな人間であるかを知ることが重要なのである。私は何も自慢はしない。ただ、読者が読後に、私が生じたことのなかにばかげたことやわれを忘れた激しい怒りがないと納得してくれていることを喜びとするのである。かつて私の心をとらえた唯一の誇りは、何人もその全生涯において、私が生じた以上の熟考と反省と分別とをもって活動しなかったという思いであつた。

だが私は、多大の犠牲を払って、私が最も自由だと思つたときでさえ、私が方向を与えようと欲した政治的激

情の急流のなかで、いざんとして自分が否定し拒否するこの背徳的な撰理の道具にほかならないことを知った。私の行為の物語とは不可分な私の理想の物語は、おそらく、その意見はどのようなものであれ、自己の理念の正当づけを経験のうちに探求することを好む人々にとっては無益ではないであらう。

……侮蔑からの革命は、利害の物質主義的原理が打ち建てた政府を顛覆した。資本を非とするこの革命は、このこと自体によって労働に新時代を開き、統治の地位につかせる。ところが、一般に扱はまっている偏見によると、統治者となつた労働は、政府中心のなやり方をとらなくてはならない。いいかえれば、こんごは、政府なしにもしくは政府に反してなされてきたことをなし、革命を発意し発展させることが政府の仕事となるのである。なぜなら、この偏見のいうところでは、知と力とが見出されるのは上流階級においてであるがゆえに、革命は上からやってこなくてはならないからである。

しかし偏見とは反対に、すべての革命が、効果的であるためには自発的で、権力者の頭からではなく民衆の胃袋から発しなければならぬこと、政府は進歩的であるよりも反動的であること、政府は革命を理解しえないであらうこと、これは、ひとりこの秘密をにぎる社会は、立法機関の法令によってではなく、その発現の自発性によって自己を現わすものだからであること、さいごに、政府と労働との間に存在する唯一の関係は、労働が自己

を組織化することによって政府を廃棄することを使命とするにあること、これらのことを経験は立証し、哲学は論証している。

……私としては、隠さずというところ、革命への焦燥や虚名への愛や野心、羨望もしくは憎悪によってではなく、不可避な反動を予見し、なお固執しつづける政府中心主義的仮定においては民主主義はりっぱなことは何一つなしえないことを確信していたために、政治の解体に全力を尽したのである。大衆についてはというところ、彼らの知性がいかに貧困であり、私の知る彼らの徳性がいかに薄弱であるにせよ、私の懸念はまったくのアナーキーよりも投票にあつた。民衆にあつては、子供におけると同様に、重罪も軽罪も、心の邪悪よりは印象の変り易さに起因する。そして私には、民衆に選挙でその主権を行使させていくらかの成功を収めさせるよりも、政治的混乱のなかで彼らの教育を仕上げるほうが、共和主義エリートにとって容易なことがわかつたのである。

押し除けられた候補者、ブルードン 1848 / 4

……四月の選挙がやってきた。私は候補者になることを引受けようという気になった。ドーブ県の選挙民にあつた一八四八年四月三日付の回状で私はこう述べた。「社会問題が提起されている。諸君はそれから逃げはしまい。その問題を解決するには、極度の急進的精神に極

度の保守的精神とを結合した人々が必要である。労働者諸君よ、諸君の雇主に手を差し出したまえ。雇主たちも、諸君の賃金労働者である者たちが近寄ってくるのを追っ払わないでくれたまえ。

私がたまたま多少援助してきた労働者諸君には、結局何が重要なのか？ 諸君の選択に値するためには、つまりらぬものを提供するだけでは足りないし、諸君の票は山師を求めてはいまい。だが、私が自分の悲惨な事多い生活を打ち明けたいなら、誰が私を推薦して諸君の注意を引くだろうか？ 誰が私にかわって語るだろうか？」私がこのように自分の考えを表明した当時は、民主主義の影響はまだ全盛であつた。私は、社会主義の目的および意義として普遍的和解を説くために、運命の急変を待ちはしなかつた。

四月十六日（パリ労働者の示威運動が国民軍）は私の立候補をだめにした。この歎かわしい日のあと、人々はおもはや極端な急進主義について語るのを聴こうとしなかつた。むしろ極端な保守主義に加わってすっかり妥協するほうをよしとした。

押し除けられた候補者、読者のない政論記者である私は、出版物の方に方向を転じなければならなかつた。人は毎日私にこういっている。書物を書きなさい、その方が新聞や雑誌より値うちがあります。これは私も認める。しかし書物では人々は読みはしない。「実証哲学」の著者、オーギュスト・コントは、その講義に二百名を

集めるのにやつとであるのに、『ル・フォブリーアン』、『ペール・デュシェヌ』および『真の共和制』は国をひっぱっているのだ。諸君が八折十六ページの本を書くのに十年の生活を費すとする。五十人の愛好家がそれを買ひ、ついでジャーナリストがやってきて諸君を彼の放下車に放りこむ。それでおしまいだ。書物はジャーナリストの修業に役立つにすぎない。今世紀における最高の種類の文学は、パリの新聞の社説であり、文芸欄である。

ブルードン、候補に選ばれる 1848/6/4

社会における国家の役割、権力の従属および政府の革命的無能力について、十年来、語り、書き、発表してきたものすべてについて考えたとき、私は、一八四八年六月の私の当選は、一部の民衆の誤解の結果であったと、信じた気がなっている。これらの問題についての考えは、私に使用しては最初の考究時代に始まっている。社会主義を私の使命としたのと同時代である。研究と経験とはそれらの考えを發展させ、それらは著作と行動においてたえず私を導き、これから語る活動のいっさいを鼓舞してきた。これらの考えが改革者が提供しうるのである最高保証を提示したあとで、私が、審判者とみなしている社会と求めしていない権力とに、ただの一時にもせよ恐るべき煽動者と見えたのは奇妙なことである。

一八四八年六月労働者蜂起のあとで

ブルードンの悔悟

……この蜂起はそれひとつで、六十年このかたに起こったあらゆる蜂起よりも激しいものである。……蜂起を止めさせるため大砲を使用するよう助言するティエールの姿が見られた。遊動隊、軍隊、国民軍による残忍な虐殺が行なわれた。……叛徒たちは征服しがたい勇敢さを示した。……テロが首都を支配した。……勝利後四十八時間にしてコンシエールジュリ(付属監獄)や市役所で囚人、負傷者、武装を解除された人々が銃殺された。……叛徒に対する報復をそそのかすため、彼らの上に最も悪質な中傷がばらまかれている。

……六月の日々のあと、私は、何も知らない人たちがらしたであろうような私のいくつかの警句についての誤りになんら抗議しなかったし、私の民衆の傾向を否認しなかった。私は息絶えるライオンに攻撃を加えなかった。しかし私は、政府中心主義的な諸傾向を攻撃し、私の知的な保守の感情を表明するのにもはや六月の日々を待ちはしなかった。私はつねに権力を自分に対抗せしめ、永久にそうするであろう。それは野心家の、また卑怯者の戦術であろうか？ それに、私は、権力の帳尻をつけることによって、政府中心主義的民主主義は裏返

しの君主制にすぎないことを立証していたのである。

……私にとって、六月の日々の記憶は悔恨として永久に心を苦しめるであろう。私はこのことを苦痛をもって認める。二十五日までは何も予想せず、何も知らず、何も見抜きもしなかった。十四日以来民衆の代表に選ばれ、幼児のように臆病に、新参者の熱心な思いを抱いて国民議会にはいった。九時間も事務局や委員会に勤め、夕方やつと疲労と嫌悪に力尽きて議場の外に出た。議会というシナイ山に足を踏み入れてから、私は大衆と関係をもつことを止めた。立法の仕事に没頭したため、日常の物事をすっかり見失っていた。国立仕事場や政府の政策や議会の内部に拡がっていた陰謀やについて何も知っていなかった。国の状態をまるっきり知らない人々が、どのようにしてほとんどつねに国を代表する人たちがであるかを理解するには、国民議会とよばれるこの絶縁器のなかで生きてみるが必要だったのである。

私は配布局から代議士に届けられるいっさいの文書、提案、報告、小冊子から『モニター』紙や『法令集』にいたるまですべてを読みはじめた。左派および極左派の私の同僚の大部分は、同じ精神的困惑と日々の事実に関する無知のうちにあった。国立仕事場について人々は一種の恐れを抱いてしか語らなかつた。というのは、民衆の恐怖は権力に与かるすべての人々の悪に対してであり、民衆は権力にとって敵だからである。毎日われわれは国立仕事場に新たな補助金を票決し、権力の無能と

われわれの無力とに身もふるえる思いであった。

不幸な見習よ！ 私がそこで生活しなければならなかったこの代表的な混乱の結果は、私が知力を無駄にはもたなかったこと、二十三日、フロコンが大演壇で、運動が政治的諸徒党によって率いられ、外国に買収されたのだと断言したとき、私はこの大臣の嘘言をわれを忘れて非難したこと、そして二十四日に私はさらに蜂起が本当に国立仕事場の解散を動機としたかどうかを質問したことであった。いな、セナル氏よ、私は、あなたが議会の正面で私を侮辱していったように、六月に卑怯者ではなかつたのだ。私はあなたや多くの人たちと同様にはか者であった。私は、議会的遅鈍のために、代議士としての義務に欠けていた。私は議会にもものを見るためにいたのを見なかつたし、警報をならすべきだったのに叫びもしなかつた。敵の前で吠えもしない犬のごとく振舞った。私は、庶民から、プロレタリアートのジャーナリストとして選ばれながら、方針や助言も与えずにこの大衆を放置すべきではなかつた。組織された十万人の人々は、当然私が懸命に世話すべき価値があった。このことは、私が諸君の事務所待ち呆けているよりも値うちがあったのだ。その後私は、私の償いのようない過誤を償うために、できるだけのことをした。

民衆の選挙宣言²⁸

次の宣言は、ブルードンの最も特徴的な著作の一つである。ここには、現代の自主管理についての天才的な予見、確かに社会再組織に関する、少しユートピア的な、またプチ・ブルジョアの「相互主義的」見解、小所有を保持し、租税に対する反感から大所有にも課税しないという、いささか常軌を逸脱した心遣い、および最後に大統領選挙への参加についての革命的な社会主義的態度が同時に見られる。この最後のものは、ブルードンにとって「つまらぬ問題」、彼のプログラムを説明するたんなる一例にすぎないのである。

共和国大統領選挙への準備のための、セーヌ県の十四郡の代表からなる中央選挙委員会は、いまその活動を終えたところである。

民衆の代表、市民ラスバイユは、社会民主主義共和党の候補に満場一致で指名された。

中央委員会はその回状をすぐ選挙民に公表するであろう。

この立候補に心から同意し、現状においては、われわれの意見の尊厳を守るため、民主主義のより遅れた他の諸分派から分離することを必要と判断したわれわれとしては、ここでわれわれの原理がいかなるものであるかを想起させなければならぬと思う。これが、われわれの行動を正当づける最善の方法であろう。

われわれの原理！

権力に到達するために民衆の投票を求めてきた人々は、いつも、根本においてはつねに約束の宣言でしかなかった、いわゆる諸原理の宣言によって、大衆をあざむいてきた。

いつも野心家と陰謀家は、多少響きのよい言葉で次のことを約束した。

自由、平等、友愛。

労働、家族、所有、進歩。

信用、教育、組合、秩序と平和。

政治への参加、租税の公正な割当、誠実安価な行政、正当な正義、財産の漸進的平等、プロレタリアートの解放、貧困の根絶！

彼らはかくも多くのことを約束したため、あとには約束すべきことが何も残っていないことを認めなくてはならない。

だが、彼らは何を守ったか？ これに答えるのは民衆に対してである。皆無だ！

民衆の真の友たる人々は、こんごは態度を変えなくてはならない。民衆が彼らの候補者に期待するものは、彼らに要求するものは、もはや約束ではなく、手段方法である。

人々が提出する手段方法によってこそ、彼らを判断することが必要である。かくてわれわれは、人々がわれわれをどう判断しているかを問うとしよう。

社会主義的民主主義者であるわれわれは、実をいうと、

いかなる分派、いかなる流派にも属していない。あるいは、いかなる分類しなればならぬとしたり、いささかわれわれは批判派であるといおう。社会主義はわれわれにとってならん体系ではない。それはただたんに抗議である。だがわれわれは、社会主義の諸著作からは旧い経済慣行に対立する原理や觀念の全体が現れ出ており、それらは民衆の信条に転じたものと考えている。われわれが自分たちを社会主義者というのは、このためである。社会主義を公然と主張しながら、有能な人たちがやっているように、社会主義から何一つ受けいれないのは、民衆を嘲弄し、彼らの軽信さを悪用するものである。

これは少しも、共和主義者だということではないし、共和制はもろもろの社会的制度にとり囲まれねばならないと認めることでもない。共和国の旗に「民主的・社会的共和制」を記入することでもない。ただ旧社会と新社会とのちがいははっきり示さなくてはならない。社会主義が実際に生み出したもの、その表われである二月革命が、いかなる点で、またなぜ社会革命であるかは、述べなくてはならない。

まず初めに、社会主義の基本的教義、純粹の教義を想起しよう。

社会主義はプロレタリアートの解放と貧困の根絶、すなわち人々の間の諸条件の実際の平等を目的とする。平等なくしては、つねに貧困が、つねにプロレタリアート

が、存在するであろう。

したがって、何よりも平等主義的な社会主義こそは、すぐれて民主主義的な方式である。それほど真剣でない政治家たちが、社会主義を認めることに何か嫌悪を感じるとしたら、われわれは彼らの留保を尊重しよう。だが、彼らとても社会主義を知ることには必要だし、われわれの見るところ、彼らは少しも民主主義者ではないのである。

ところで、何が不平等の原因であろうか？

この原因は、われわれの見解によると、とくにジャコブ・ジャック（ルノー）以後あいついで提出されたすべての社会主義的批判によって明らかにされてきた。この原因は、三重の抽象物、すなわち資本、労働、才能の、社会における具現にある。

これは、社会が、この定式の三つの用語に対応する市民の三つの部類に分裂せしめられているからであり、すなわち資本家または所有者の階級と、もう一つ労働者の階級および第三の能力の階級が形成され、たえず諸カーストに分裂し、人類の一半が他の一半の奴隷となつていくからである。

資本、労働、才能という三つのものを有機的に事実上分割したと称したところではどこでも、労働者は隷属化されてきた。彼は奴隷、農奴、賤民、平民、プロレタリアと次々によばれている。資本家は搾取者であった。彼はあるいは貴族とよばれ、あるいは所有者もしくはブル

ジョアとよばれている。才能ある人間は、寄生者、腐敗と隷従の媒介者であった。それは初め僧侶、ついで聖職者、今日では官公吏であり、すべては能力と独占とからなる種類であった。

それゆえ社会主義の基本的教義は、資本―労働―才能という貴族主義的定式を、労働！ という、より単純な定式に解消し、したがってすべての市民を同時に同一の資格および同一の度合において、資本家、労働者、学者または芸術家たらしめることにある。

生産者と消費者とは、事柄の現実においても、経済学におけると同じく、つねに異なる二つの視点から考えられた同一人である。どうして資本家と労働者、労働者と芸術家についてもそれと同じでない理由があるのか？ 社会組織の中でこれら特質を切り離すなら、諸君は宿命的にカースト、不平等、貧困を創り出すことになる。反対にそれらを各個人のうちに結合せよ。そうすると諸君は平等を創出し、共和制を有することになる。さらに同様に、政治秩序においても、いつかは治者と被治者、管理者と被管理者、公務員と納税者等々の別が消滅しなければならぬ。社会的理念の発達によって各市民がすべてであることが必要である。なぜなら、彼は、すべてでないなら自由でなく、どこかで抑圧と搾取を蒙らざるをえないからである。

では、この大々的な融合を行なうための手段は何であるのか？

には、あいまも混乱もごまかしもない！ 社会主義的民主主義者と自称する人々は、この政見発表にわれわれといっしょに署名し、われわれの団体^{グループ}に加入するとよい。この署名によって、この署名によってのみ、われわれは彼らのうちに兄弟を、民衆の真実の友を認め、彼らの行為に同意するのである。

そしていま、悪を根絶し、暴力を止めさせる方法は何であろうか？ それは、純益を攻撃し、所得を横取りすることであろうか？ また、所有に対する最大の尊重を明言しながらも、所有が労働によって獲得され、法律によってこれを聖別化したことに応じ、租税をとおして所有を奪い取ることであろうか？

とりわけこの点で、民衆の真の友と民衆に命令することを欲するだけの人々とが区別される。真の社会主義者が信用のおけない模倣者から別れるのも、この点においてである。

暴力を根絶する方法は、もう一度いうと、暴力を没収することではない。それは原理に原理を對抗させることであり、要するに信用を組織することである。

信用を組織するというのは、社会主義にとって利子付きで金を借りることではない。それではつねに資本の宗主権を認めることになるだろうからである。信用の組織は労働者相互の間に連帯を組織することであり、交換価値を有する物はすべて交換の対象となることができ、したがって信用に材料を提供することができるという通俗

手段は、悪そのものによって示されている。そこでまず最初に、悪をできるかぎりもっとよく確定することに努めよう。

プロレタリアートと貧困とは、二つの階級すなわち労働して所有しない階級と、所有して労働しない、したがって生産せずに消費する階級とへの社会の分裂を構成的な原因とするがゆえに、その結果、社会が蒙る悪は、資本はそれ自体として生産的であり、一方労働はそれ自体では生産的でないとする奇妙な虚構に存することになる。実際、労働と資本との分離というこの仮定では、もろもろの条件が平等であるためには、資本家が労働せずに彼の資本によって取得すると同じく、労働者も資本なしに彼の労働によって取得することができなくてはならないであろう。ところが、これは起こりようもないことだ。したがって、平等、自由、友愛は、現存体制においては不可能である。したがって貧困とプロレタリアートとは、現在の所有構造の宿命的帰結である。

このことを知りながら承認しない者はだれでも、ブルジョアジーとプロレタリアートを等しく欺いている。民衆の投票を勧め、しかも彼らにこれをかくす者はだれであれ、社会主義者でも民主主義者でもない。

われわれはこのことをくりかえしていおう。資本の生産性をキリスト教は暴利の名で非難したが、暴利こそは、貧困の真の原因、プロレタリアートを生む真の原理、共和制建設に対する永久の障害である。これ

の経済原則に従って相互保証を創出することである。同様にして銀行家は、彼に利子を払う卸業者に金を信用貸す。

地主は小作料を払う農民に土地を信用貸す。

家主は家賃を払う借家人に住居を信用貸す。

商人は定期に買ってくる顧客に商品を信用貸す。

同様に労働者は、月末または週末に賃金の支払いをする雇主に彼の労働の信用貸をしている。われわれはいまのままであるかぎり、互いに何かの信用貸をしている。信用で売り、信用で働き、信用で飲んでいるといえないだろうか？

だから、労働は自己を信用貸すことができ、資本と同じく債権者であることができる。

だからさらに、二人もしくは多数の労働者が彼らのそれぞれその生産物を信用貸すことができ、このような方法でやっていくことに一致したら、彼らのあいだで信用を組織することになるであろう。

これが、パリおよびリヨンで、出資金もなく資本もなしに自発的に形成された労働者の組合が、見事に理解していたことであり、このことだけによって彼らは信用をつくり、人のいうように労働を組織している。したがって信用の組織と労働の組織と組合とは、一つの同じものである。このことを語るのには一派でなく、一理論家でもない。それを立証するのは現実の事実であり、革命的事実である。

かくして一つの原理の実施は民衆を導いて他の原理を
 発見させ、一つの解決の達成はつねにもう一つの解決を
 もたらすものである。それゆえ、労働者たちが共和制の
 あらゆる点について理解し合い、同じ仕方でも自分たちを
 組織するようになったならば、労働の主人であり、労働
 によって新たな資本をたえず造出している彼らは、彼ら
 の組織と競争とによって間もなく疎外されていた資本を
 取り戻すことは明白である。彼らは初めに小所有、小商
 業および小産業者を自分たちの許に引き寄せ、ついで大所
 有と大企業、つづいて最大規模の経営、鉱山、運河、鉄
 道を引き寄せる。彼らは、所有者を強奪も強請もせず
 に、生産者を次々に参加させ、所有を清算することによ
 って、すべての物事の主人となるであろう。

……これが、われわれの眼の前で民衆が自発的に開始
 した事業であり、彼らが裁判沙汰や最も恐るべき窮乏の
 あらゆる困難をおし、すばらしいエネルギーをもって
 追求している事業である。そしていいおとしてはならな
 いのは、この運動を開始したのが学派の大家たちでな
 く、最初に推進したのが国家ではなく、それが民衆であ
 ることだ。われわれはここでただ彼らの説明者であるに
 すぎない。われわれの信条、民主的社会的信条は、すで
 にユートピアではなく現実である。われわれが説くのは
 なんらわれわれの学理ではない。それは民衆の理念であ
 って、われわれはそれをわれわれの発展のためのテーマ
 としているのである。このことを認めず、組合や共和制

についてわれわれに語り、しかも真の社会主義者、真の
 共和主義者をもその兄弟としてあえて認めようとならない者
 たちは、われわれの仲間ではない。
 十年このかたこの考えに身を捧げてきたわれわれは、
 民衆に伍するのに彼らの勝利を待ちしなかつたのであ
 る。

……この事業の達成において政府や国民議会やブルジ
 ョアジー自身さえがわれわれを擁護し援助してくれるら
 ば、われわれはそれを感謝するだろう。だが、民衆の真
 の利益とみなすことからわれわれをよき引き離そうと
 はしないことだ。無益な見せかけの改革でわれわれを欺
 こうとはしないことだ。われわれは、十分啓発されてい
 るのではや欺かれぬし、どのように世界が進んでい
 くかを、われわれに忠告をする政治家たちよりもよく知
 っているのだ。

われわれは、国家が予算を割当てて労働者の解放に寄
 与してくれたら喜ぶだろう。だが、国家による信用の組
 織といわれるものは、ただ疑念をもってしか見ないだろ
 う。それは、われわれの考えでは、人間による人間の搾
 取の最後の形態にすぎない。われわれは国家による信用
 を拒否する。なぜなら国家は、九十億フラン借金しなが
 ら、信用貸できる分は一サンチームももっていないから
 であり、その出資金は強制流通の紙片を基礎にしている
 にはかならないからである。強制流通は宿命的に価値の
 低下をとめない、価値低下はつねに所有者に先立って労

働者を襲うからである。組合を結成した、もしくは結成
 途上にあるわれわれ生産者は、われわれの交換を組織す
 るのに、国家も貨幣の強制流通も必要としないからであ
 る。さいごに、国家による信用は、つねに資本による信
 用であって労働による信用ではなく、つねに君主制であ
 って民主制ではないからである。

われわれに提案され、われわれが確信する力のすべて
 をもって斥けている方式では、国家は、信用を設けるた
 め、あらかじめ資本を手に入れなくてはならない。これ
 ら資本を、国家は租税によって、所有者に要求しなくて
 はならない。だから、これは、原理を破棄することが問
 題であるときに、つねに原理に立ち戻ることである。富
 を造成する必要があるのに、富を移動させることであ
 る。憲法で所有権を不可侵と宣言したあとで、それを撤
 回することである。

他の多くの人々も、そうした考えで、それほど進歩的
 でなく、また怪しげでもない思想や小心翼翼たる道徳に
 力を入れているが、われわれは彼らの戦術を何も非難は
 しない。なにも金持とではなく、原理と戦っており、反
 革命が中傷することを止めないわれわれとしては、これ
 まで以上に厳格主義者でなくてはならない。われわれは
 社会主義者であって、掠奪者ではないのだ。

われわれは累進課税を欲しない。なぜなら、累進課税
 は純収益であり、われわれは組合によって純収益を廃止
 しようとするからであり、もし累進課税が金持か

ら彼の収入の全部を取り上げるのではないならば、それは
 プロレタリアートになされる一つの譲歩、暴利を取得す
 る権利の一種の回収でしかなく、または収入全部を取
 り上げるならば、それは財産の没収、あらかじめの補償
 もなく、公共の利益にもならない収奪であるからである。
 だから、何よりも政治家と自称する人々は、累進課税
 を所有に対する報復、ブルジョアのエゴイズムに対する
 懲罰として主張するとよい。われわれも彼らの意向を尊
 重し、いつか彼らの原理が実際に用いられることがある
 場合には、神の正義の行なわれるままにしよう。資本制
 のためにすべてを失った人々の代表であるわれわれにと
 って、累進課税は、まさに強制された返済であるがゆえ
 に、われわれには禁じられている。われわれはそれを決
 して民衆に提案しないであろう。われわれは社会主義者
 であり、和解と進歩の人々である。われわれは反動も農
 業法も要求するものではない。

われわれはまた国債利子への課税も欲しない。なぜな
 らこれは、累進課税のごとく、金利生活者に対しては没
 収でしかなく、民衆に対しては妥協、欺瞞でしかないか
 らである。われわれは、国家はその公債を償還し、かく
 してより低い金利で金を借りる権利をもっていると思
 う。しかし国家は、課税を理由にしてその約束を履行し
 ないことは許されないと考える。われわれは、社会主義
 者であって、破産者ではないのである。

われわれは相続税も欲しない。なぜなら、この税もま

た所有権の取消しでしかなく、所有権は万人によって認められた憲法上の権利であるがゆえに、それにこめられた多数者の願望を尊重しなくてはならないからであり、これは家族を傷つけるであろうからであり、われわれはプロレタリアートを解放するために新たな偽善をなすにすぎないからである。財産の譲渡は、組合法の下で労働用具には適用されないで、不平等の原因とはならない。死んだ所有者の財産を最も速い、しばしば最も貧しい親族のものとせよ。われわれは、社会主義者であって、相続財産の捕獲者ではないのである。

われわれは奢侈品に対する課税を欲しない。なぜならこれは、奢侈品産業に打撃を与えるからであり、奢侈的生産物は進歩の表現自体だからであり、労働の支配と資本の従属のもとでは、奢侈は例外なくすべての市民の手の届くものとなるべきだからである。所有を奨励したあとで、われわれは所有者の享受を罰する理由があらうか？ われわれは、社会主義者であって、羨望者ではないのである。

……われわれは国家による鉱山、運河、鉄道の取用を欲しない。これはつねに君主制に、つねに賃金制度に属することである。われわれは鉱山、運河、鉄道が、国家の監督のもとで、国家の定める条件により、自己の責任において作業する、民主的に組織された労働者組合に引き渡されることを欲する。これら組合が、農業、工業および商業に提案されるモデルであり、民主的・社会的共

和制の共通の絆に結ばれた、諸生産組合と諸結社とのこの巨大な連合体の第一の核であることを欲する。

われわれはもはや、人間による人間の搾取と同じく人間による人間の支配をも欲しない。社会主義の定式を採りいれる人々は、このことをよく考えたであろうか？

われわれは、人間および市民の諸権利、資本および才能の諸属性の労働者におけるまっただ融合を欲すると同じく、国家の経費による経済を欲する。このためにこそ、われわれは社会主義が指し示し、しかもとくに政治家と自称する人々が理解していない若干の事柄を要求するのである。

政治はその役目を限りなく専門化し、増大する傾向にある。社会主義はそれらを互いに融合させることを目指すものである。

かくしてわれわれの考えでは、公共事業のほとんど全部は軍隊という大群の人々によって営むことができ、また営むべきである。公共事業にこのように参加することは、若き共和主義者が祖国にささげるべき第一の義務であり、したがって軍事費および公共事業費の予算は二重の役目を果たすことになる。それは一億フラン以上におよぶ経済であるが、政治はそれを気にかけることはない。人々は職業教育のことを語っている。農業学校とは農業のことであると思う。工芸、製作の学校とは、仕事場のことである。商業の学校とは帳場である。鉱業の学校とは鉱山である。航海の学校は船舶である。行政の学校

は行政府である、等々。

徒弟は職人と同じく労働にも必要である。学校はどうしてそれを別にするのか？ われわれはすべての人々に同じ教育を受けさせることを欲する。民衆にとって貴族の子弟の学校でしかなく、財政にとっては二重の用途でしかないような学校など、なんになるのか？ 組合を組織せよ、そして同時に仕事場がすべて学校となることによつて、労働者はすべて主人となり、学生はすべて徒弟となる。仕事場で研究室におけると同様に、またそれにもまして優秀な人々が生みだされる。

ことは政府においても同じだ。政治的野心の永遠の対象である各省大臣制を廃止しないならば、大統領制に反対だというのでは足りない。国民議會は、共同の審議と票決によつて立法権を行使するように、その諸委員会の組織とおして執行権を行使すべきである。大臣、次官、部長等々は、国民議會議員とともに二重の職務を果たしており、彼らの無為で放埒な、陰謀と野心に耽る生活こそは、行政の混乱、社会にとつて有害な法律、国家にとつて無駄な費用の不断の原因なのである。

われわれの若い新参者たちは、次のことを心に銘じて身を処してもらいたい。社会主義は政府中心主義と正反対のものであることだ。これはわれわれにとつて、主人と奴隸とのあいだにはいかなる社会も存在しない、という戒律と同じほど古いことなのだ。

われわれは、普通選挙とならんで、またこの選挙の帰結として強制委任（選挙人の議員）の適用を欲する。政治家たちはそれを嫌がる！ 彼らの見るところでは、民衆は、その代表者を選ぶことによつて受任者に自己を委ねるのではなく、その主権を譲渡するといおうとするのだ！ たしかにそれでは社会主義でなく、民主主義でさえもない。

われわれは、他人の自由の尊重を損うことのない、人間および市民の無制限の自由を欲する。

- 結社の自由
- 集会の自由
- 信教の自由
- 出版の自由
- 思想および言論の自由
- 労働、商業および産業の自由
- 教育の自由

一言でいえば、無条件的自由。

ところで、これら自由のうちには、つねに、旧式の政治が認めないものが何か一つ、すべての物事の破壊をもたらすものがある！ 人々はいつかわれわれに、例外つき自由もしくは例外なしの自由を欲するのかどうかを、語るであろうか？

われわれは家族を欲する。われわれ以上に家族を尊重する人々がどこかにいるであろうか？ しかしわれわれは家族を社会の典型とは考えない。君主制の擁護者たち

は、君主制が家族をイメージとして建設されたと教えた。家族は家長制もしくは王朝制の要素であり、君主制の原基である。市民社会の典型は友愛社会である。

われわれは所有を欲する。しかしそれは、正しい限界、すなわち労働の成果の自由な処分に引き戻された所有、濫用のない所有である！これについてはこれ以上語る必要はない。われわれを知るほどの人たちはわれわれを理解している。

……そしてこんどは大統領制というこのつまらぬ問題に向おう。

一方では民衆が棄権すべきか投票すべきか、他方ではいかなる旗のもとで、いかなる政見発表のもとで、選挙が行なわれるかを知ることが、たしかに重要であった。

……中央選挙委員会は全会一致で市民ラสบアイユを大統領候補に推薦することに決定した。

パリ市民六万六千、リヨン市民三万五千によって選ばれたラสบアイユ。

社会民主主義者、ラสบアイユ。

政治的瞞着の仮借ない告発者、ラสบアイユ。

治療法に関する著書によって人類の恩人に列せられた、ラสบアイユ。

この候補者を支持するにあたってわれわれは、誰かが尊敬すべきルドリュ・ロラン氏についてどこかで書いたように、共和国に首長をたまたま与えようとは少しも考

えていない。それどころか、われわれはラสบアイユを大統領制の原理に対する生きた抗議として認めているのだ。われわれが彼を民衆の選挙に推挙するのは、彼が当選可能であり、もしくは自らそう思っているからではなく、彼が当選不可能だからであり、彼とともに君主制の似姿である大統領制が不可能になるだろうからである。

われわれは、ラสบアイユへの投票をよびかけて、この偉大な市民を恐れるブルジョアジーにこれ以上挑戦しようとは思わない。われわれが何よりも求めるのは和解であり、平和である。われわれは社会主義者であって攪乱者ではない。

われわれはラสบアイユの立候補を支持する。それは、こんご共和国の旗のもとにはただ二つの党派、労働の党派と資本の党派としか存在しないという考えを、国中の人々の眼にもっと強く示すためである。

権威の原理について⁽⁴⁾

一八四八年革命の暴風雨を過ぎたブルドロンがそこから引き出した教訓、国家と権力とに対する最終有罪宣告が、これである。

統治の偏見⁽⁵⁾

最初の間人たちが社会における秩序というものを考えたのは、家長制的または階層的形態のそれであり、すなわち原理においては権威、行為においては統治である。正義は、のちには配分的正義と交換的正義とに区別されたが、初めはただ前者の面でのみ現われ、一人の上位者が下位者たちに、彼らの各自に属するものを与えたのである。

したがって統治という觀念は、家族の習俗と家庭の経験とから生まれた。そのときはいかなる抗議も起こらず、政府は社会にとって父と子の間の従属関係のごとく自然なもののように思われた。それゆえにこそド・ボナール氏は、家族は国家の胚であり、国家の本質的諸範疇を、すなわち王を父に、大臣を母に、臣下を子に再現し

ていると、正当に語ることができたのである。また家族を社会の要素と考えた友愛主義的社会主義者たちがすべて、統治の最も極端な形態である独裁に到達しているのも、このためである。ノヴーの自分の国家におけるカベ氏の行政もその見事な一例である。こうした思想の系統を理解するのに、われわれはさらにどれだけの時間を必要とするであろうか？ 政府による秩序という原始的な觀念はすべての民族のものである。たとえ最初から、権力の働きを組織化し、制限し、修正し、一般的必要と状況とに適合させるために種々の努力が尽くされてきたことが、肯定のうちには否定が含まれていたことを証明するとしても、これに對抗するいかなる仮説も述べられなかったことはたしかである。人間の精神はどこでも同じままである。もろもろの国民が、未開野蛮な状態から抜け出るにつれ、政府中心主義の道に引きこまれ、つねに同じ諸制度の輪をたどったことが見られ、すべての歴史家や著述は、これら諸制度を君主制、貴族制、民主制という相次ぐ範疇の下に整理している。

しかしもっと重大なのは、次の点にある。

政府についての偏見が人々の意識に最も奥深くしみ込み、その類型で理性を打ち直したため、それ以外の考え方をすることが長い間にわたって不可能にされ、思想家のなかで最も大胆な人たちが、政府はたしかに禍いのものであり、人類に対する懲罰であるが、しかし必要悪であるという始末である。